



前と僕と後

泰然自若

自分の行動を見直そう。そんな切欠なんてものは、大抵の出来事において運が悪いものだと、僕は感じている。そんな時に、神様なんて居るかどうかも判らない存在を恨んでしまう僕は、きっとそうした実像の無いものに有耶無耶ながら起こった物事を押し付けて、自分という体裁でも保っているのだろう。

そんな変に哲学的な考えをしなければならないほど、僕は今置かれている状況に嫌気が差していた。とにかく、午後から大学の講義に参加するため、三年間通い慣れた、学生通りと言われる大学へ続く一本道を僕は駅からずっと歩いてきたはずだった。

今も、視線を少し上に向ければ坂道の終着点が見え、小さくもはっきりと大学の門が開かれている。

横を向けば、交通量の少ない自動車道が通りの真ん中を貫き、歩行者天国でもないのに、学生らしき若人達が、跋扈しているのを見る事が出来た。

彼らは僕の置かれている状況を敬遠しながらも、好奇の色を隠そうともせずに見つめては去っていく。

「付き合ってるんです。私達」

僕の斜め後ろへ勝手に陣取りながら、右腕を妙にぎこちなく握る一人の少女が言った。

僕と少女の目の前には、スキンヘッドで目つきの悪い、如何にも不良だと言える風体をした男が居て、少女はそのスキンヘッドに向けて喋っていた。

スキンヘッドは物凄い顔をして僕を睨みつける。それはもう、ブルドッグがさらにブサイクな顔になっているのに、瞳だけはドーベルマンみたいな獰猛な犬を思わせる怖さを見せる。そんな視線を僕に向けて、命の危険を感じさせるほどだ。

僕は、さながら狩られる側に回ってしまった小動物なのかもしれない。とはいえ、黙ってやられる訳にも行かない。様子を伺い、隙あれば当事者達を残して全力疾走する覚悟を決める。筋肉痛になろうと肉離れになろうと知ったこっちゃ無い。僕の命に関わるのだから、死に物狂いだ。

「本当かよ、アンタ」

僕がそんな覚悟を勝手に決めていたら、スキンヘッドが顎を持ち上げて、見下すように問い掛けてきた。けれども、スキンヘッドの声が、僕の予想より幾らか高かったので拍子抜けしてしまった。案外、ブルドッグのままなのかもしれない。

「本当よ」

「お前に聞いてねえ」

スキンヘッドの言葉は正しいし、普通の反応だと僕は同感できる。何故、初対面かつ事情も知らない通行人だった僕が、行き成りこんなドロドロの恋愛事情に巻き込まれなければならないのか理解できなかった。

大学へ向かう僕の耳に口論が入り込んできた。その方向に目を向けたら少女とスキンヘッドが言い争いをしていた。昼間からお盛んな事で、などと思っていたのが運の尽き。少女と目が合ったと思えば、さも知り合いみたいに「あっ」なんて声を出して此方に近寄って背中に隠れる始末。

「もうウンザリなの。付き纏わないで」

「俺は、お前の事を。お前だってそうだったじゃねえか」

「そんなんじゃない。あの時、絡まれていたから誰でも良かったの」

少女とスキンヘッドのやり取りから、今度の被害者は僕になる事を悟ってしまった。なんとも、この少女は魔性の属性を持つらしい。そんな事を考えながら、僕は一刻も早く逃げ出したいので、早々と少女を見限る事にした。

元々、付き合ってもいなければ面識すらないのだから、当然の判断だ。確かに、今時珍しい黒髪の綺麗なセミロングに、ぱっちり大きい瞳が可愛いと素直に思えるけれど、だからといって厄介ごとと巻き込まれるのはごめんだった。

むしろ、スキンヘッドがこの少女を好いた事の方が驚きだった。

「僕は、別にこの少女と付き合っているわけじゃないですよ」

僕の言葉に、少女が握っていた僕の腕を力いっぱい振り、スキンヘッドの男は、なんとも言えない苦々しい顔を作っていた。

それもそうだ。今、スキンヘッドが聞かされた内容がそっくりそのまま再現されているようなものだったのだから、困惑するのも頷ける。

すると、少女は居た堪れなくなった、というよりは僕が役に立たなかったので一目散に逃げ出した。

「おい、待て！」

スキンヘッドは一瞬、追おうかと思って僕の横を通り過ぎたが直ぐに諦めたように、ただ少女が走り去って行った駅の方角を眺めていた。

僕は、その光景を眺めながら、スキンヘッドと同じ末路を辿らずに済んだことに安堵のため息を漏らした。

「待てよ」

スキンヘッドがこちらに向き直りながら、気まずそうに声を掛けてきた。

その顔から、僕が憂さ晴らしのために殴られる事は無いと窺い知る事が出来た。スキンヘッドな出で立ちではあるけれど、根は良い人なのかもしれないと思った。

「悪かったな」

「いえ、仕方ないですよ。こういうのは」

「そうか」

「そうですよ」

後頭部を擦りながら、スキンヘッドは力無く笑った。僕は、これは絶対に愚痴を吐かされるパターンだと確信したが、どうにも、回避する術が思い浮かばなかった。

「俺は、いつもこうなんだよな」

「そうなんですか」

「だがよ、俺は本気だったんだよな」

いきなり、直球を放り込むスキンヘッドに愕然としつつも、赤の他人に赤裸々な恋愛観を告白し始めるスキンヘッドに、妙な好印象を持ってしまった。

「俺が、涼子と出会ったのもな。こんな状況だったんだ」

「そうですか」

僕には適当な相槌を打つ以外に何も出来なかったので、取り合えず吐き出させる事を優先させる事にした。

人通りがまったく無ければ僕的心情も幾分はマシで、もしかしたらスキンヘッドの愚痴を結構親身になって聞いたかもしれない。時間は押していたけれど、若人の愚痴を聞いてやれないほど、僕は生き急いではいなかったけれど、今の状況ではそうもいかない。ただで、さえ先ほどの騒ぎで目立っていたのに、女の取り合いをしていたはずの男同士で世間話に興じているという奇妙すぎる光景に興味津々だと言わんばかりに視線が刺さり、僕は一刻も早く立ち去りたかった。

「あの、移動しませんか」と僕は言った。

「お、おう。こんな場所じゃ、流石に不味いか」

そう言って、スキンヘッドは笑った。その笑い顔がまた先ほどの強面と違って、人が良さそうな笑みだったので、彼は絶対に心は好青年なんじゃないかと真剣に考えてしまった。

気付けば、逃げ出すタイミングを失っていたし、何処かそわそわしているスキンヘッドを置いて全力で走り去るのも気が引けてしまっていた。

スキンヘッドと僕

陳腐な話をされた。それもスキンヘッドで強面の男が、失恋を経験して傷心して自分の恋愛話を語り始めたのだから、僕は一体どんな顔をしてその話に相槌を打てば良かったのか今でも判らない。ただ、僕はぽつりぽつりと吐き出していくスキンヘッドを最寄の喫茶店に連れ込んで、一杯四百五十円のコーヒーを奢る事になってしまっていた。

「涼子は、本当に可愛くてな」

「そうですね」

僕は、水っぽいコーヒーを啜った。

店内で流れているのは雰囲気にもこれでもかと言うくらい似合わない、今人気が出てきているアイドルグループの曲だった。店内は薄暗いながらも落ち着いた雰囲気、僕は何ともなしに、これは裸電球みたいな安心感があると思っていたけれど、この曲で全てが台無しになっていた。

「アンタも可愛いと思ったのか」

「否定はしませんよ」

僕が素直に想いを吐き出したのは、スキンヘッドの会話に興味が無かったのもあるが、喫茶店のマスターも流れている曲に顔を顰めていたのを見て、これは壮年のマスターの趣味で無い事に、変な安堵を覚えていたからだった。

「満更でもなかったのか」

少し、棘のある声に聞こえ、僕は自分の顔が引き攣るのを感じていた。本音を言って良いものかと逡巡したが、どうにもスキンヘッドが怒り出すように思えなかった。

まじまじと見つめたわけでもないけれど、出会った時の野性的な怖さは微塵も感じられなかった。

「きっと、貴方でなければ助けてあげようなんて気になったかもしれません」

てっきり僕の言葉に不機嫌になると思ったのだが、スキンヘッドは柔和でくしゃくしゃな顔で笑みを浮かべた。

「そうだろうな。涼子が可愛い事に変わりはない」

本当に、涼子と言う少女を好いていた事を知らされた。思った以上に、スキンヘッドが純粋な男だという事がわかってきたが、解った所で僕は一体どうすれば良いのか。

僕は少女を思い出してから、目の前のスキンヘッドを眺めてみる。似合っていないと即答出来た。まず、年齢がどう見たって違う。少女はまだ中学生か高校生くらいに見えたとし、スキンヘッドは二十歳を当然越えているだろう。

どう見たって、お似合いではないし、犯罪だとすら思えてくる。だが、僕の邪まな考えとは裏腹にスキンヘッドは、暫くコーヒーカップの取っ手を指で弄んでいた。

「アンタ、良い人だな」

突然、スキンヘッドがそうやってきた。

「そうですか？」

「俺は、こんな”みてくれ”で、その日暮らしのプーだからよ。ダチもそういった奴らばっか」

どうやら、新しい愚痴を聞かされる事になったようだ。

「そんな俺も、昔は真面目だったんだよ。涼子みたいに黒髪だった。もっとも坊主だったけどよ。中学じゃ、ピッチャーで四番にキャプテンだってやってたんだぜ」

「体付き、良いですもんね」

身長は百八十くらいありそうで、肩幅も僕より全然広かった。日に焼けているし、僕より健康的な身体で、なんだか少し悔しかった。

「けどよ、高校で挫折しちゃってな。俺より、球種が多くて、長打力があって、とにかく巧い奴が居たんだ。結局、俺はベンチを暖め続けた。頑張ったんだけどよ、誰も俺の姿を見てくれなくてな。最後には、監督に言われたよ。マネージャーになって部員と私を支えてくれって」

スキンヘッドは泣きそうな顔をしていた。対して、僕も泣きそうだった。何で、こんな愚痴を僕が聞かなければならなくなったのか解らないし、講義にも間に合わないだろう事を、喫茶店の壁に掛けられている時計を拝見してしまい、現実を見せ付けられていた。

全力で走っても間に合わないと判っていても、息を荒くしていた方が体裁を保つ事は出来そうだ。

「それから、俺は落ちたんだよな。今じゃ、その日暮らしで喧嘩もやれば、恐喝くらい平気で出来るようになっちゃった」

こんな事、一刻も早く終わらせたかった。

「でも」と僕は言った。

「貴方は、それを悔いている。なら良いじゃないですか」

スキンヘッドは僕を見た。叱られていた少年みたいな顔だと僕は思った。

「貴方は、偽ってるだけですよ」

「偽ってる？」

「涼子さんを好いていたのに、どうしてそんな自分の悪い話ばかりするんです？」

「それは、俺がこんな”みてくれ”で涼子も愛想を」

「違いますよ。貴方は怖かったんだ。ただそれだけです」

スキンヘッドの瞳が揺れていた。その瞳は酷く怯えているように僕には見えた。

「何言ってやがる」

「それに、気付いていた。涼子さんが貴方を本当は好いていない事を。それに気付きながら、考えないようにしていた。だから、別れ話の拗れで僕が巻き込まれた時、貴方は怒っていた。いや、怒ろうとしていたんですよ」

「くだらねえ」

スキンヘッドの視線は泳いでいるけれど、顔はしっかりと僕の方に向けていた。顎が少しだけ下がり、上目遣いのような目に僕は、酷い頭痛に苛まれる。

「貴方は、愛されなかった事を自分の姿と過去の出来事の原因にして逃げようとしただけだったんですよ」

「もういい」

「貴方は、涼子さんを助けた。それは何故です？ きっと、戻りたかったんですよ。中学校の頃へ。あの頃の自分へ」

「黙れ」

「だから、純粹に真っ当に生きようとした。けれども、涼子さんは貴方を好いては居なかったし、その場凌ぎに利用されただけだとも自覚してしまった。その事に怒ったけれど、同時に諦めたんだ」

「やめろ」

「やっぱり、俺は駄目なんだ。俺なんかが戻れるはずが無い」

「喋るな」

スキンヘッドの声は弱々しく、僕に縋ってきた。もう、何も言わないでくれと。これ以上、苦しめないでくれ。そう懇願されているように思えた。

「最初に、言いましたよね。それで良いんですよ」

スキンヘッドは、ぼーとした表情で僕を見ているように感じる。けれど、スキンヘッドは僕を見ていない気もした。

僕は構わず話を続ける。

「貴方はそれで良いんですよ」

「……良いのか。俺は、これで良いのか」

僕は、コーヒーを口に含んだ。もう、温くなった水っぽいコーヒーだったけれど、逆にその温さが心地良かった。

「貴方は、ずっと昔のまま」

スキンヘッドは惚けたような顔をしていた。その顔はもう、強面でもなんでも無い。何処にでも居る純粹な少年だった。皆と楽しい事がするのが好きで、運動する事が大好きで、褒められると凄く喜ぶ。何処にでもいる少年だった。

「何も変わっていないんですよ。貴方は、ずっと変わっていません」

「ずっと……」

「だから、戻れないのではなく、戻る必要すらなかったんです」

入店を知らせるベルが自己主張をしてから二人の男女が入ってきた。僕はそれが仲の良いカップルだと一目で判った。何の事は無い、手を繋ぎ合って身体を寄せ合っている二人のその顔は、心から楽しいと思えたからだった。

視線を戻すと、スキンヘッドも同じように入ってきたカップルを見つめていた。

「なりたかったな」

スキンヘッドはぼつりと呟いた。

「そうですね」

「俺は、どうすれば良かったんだ？」

僕に向き直ったスキンヘッドは、相変わらず僕を見ていなかった。小さく、僕はため息を吐き出すとスキンヘッドは、怯えたように身体をビクつかせた。

「別れ話をされた時、きっぱりと受け入れれば涼子さんの受け取り方も違ったかもしれませんね」

「そんなもん、なのかな」

例え、僕の言った通りに行動しても、事態が進展したとは考えられなかったが、可能性と思え

ばゼロというわけではないと思いたかった。

スキンヘッドの男は、力無く笑いもう冷めてしまっている水っぽいコーヒーに口をつけて、苦い。と呟いた。

「押して駄目なら、引いてみろ。って言葉がありますからね」

「そっか。ああ、失敗したな」

「人生は失敗の方が高いですよ」

「痛いミスだぜ、九回ワンアウト。ランナーは一、三塁でバッターは俺だ。一打サヨナラの場面」

例え話なのかは知らないが、何にしても長くなりそうな出だしだと思えた。それでも、僕は素直に聞き入る事にした。

スキンヘッドの顔を見ていると、僕はなんだかやるせない気分させられてしまったからだ。できるならば、この夢見る少年に一角の幸福が訪れる事を、信じてもない神に祈ってみた。

「ツーストライク、スリーボール……アイツは振りかぶった。ランナーが居るにも関わらずに。向かってくる球はしっかりと捉えていたさ。タイミングはバッチリだった。なのに、ゲッツーでゲームセットだ」

スキンヘッドは泣いていた。

「アイツのカーブは、縦に大きく落ちるんだもんな」

それが、スキンヘッドが自分を見失った始まりだったのだろう。それを最後に、スキンヘッドはテーブルに顔を伏せた。

僕は、綺麗さっぱり水っぽいコーヒーを飲み干すと、伝票を持ちレジへ立って二人分のコーヒー代を出した。

店内で流れている曲は、いつのまにか雰囲気合う落ち着いたジャズっぽい曲になっていた。音楽に詳しくは無いが、この喫茶店にえらく合っている。気になって、辺りを見回すとカウンター席の隅っこに、さり気無く古いCDラジカセが見えた。

僕の視線に気付いたのか、会計を済ませたマスターは照れ笑いを浮かべながら僕に会釈をして戻っていった。

店外に出れば、いつもと変わらない学生通りがあり、若者がどこかを目指して歩いていく。

僕の携帯が鳴っている。バイブレーションにしているから振動で判った。きっと、教壇に立っていない事を誰かが知らせたのだろう。

ふと、先ほど聞いたベルが鳴った気がして、僕は何気なく振り向いた。

後ろには、何も変わらない光景が広がっている。視線を少し下に向ければ坂の傾斜に合うように道がずっと続いていくのを這うように見ている気分になった。

僕は、足を坂上に向ける。腕時計に目をやれば、すでに三十分も遅刻しているのが判ったけれど、急ごうと足早に進む気にはならなかった。

僕が、涼子と再び再会したのは一週間後で、僕は本を返却しに大学の図書館に向かった先だった。彼女は、文庫の小説を読んでいたし、僕は僕で返却したついでに、図書館にある持ち出し禁止の本でも眺めようかと、図書館の奥にある禁書棚へ歩いている時だった。

本当なら、僕と涼子は気付くはずも無かったけれど、お互い何かに集中してはいなかったし、何より、僕の足音が濡れていたのが変に反響していたのが原因だ。涼子は顔を挙げて、気まずそうに顔を少しだけ顰めて、僕は僕で、声を掛けるべきなのかを少しだけ悩む事になった。結局、それだけの事だったけれど、涼子は再び本に視線を落として、僕も奥へ普通に歩いていく事が叶ったのだから問題は無かった。

「ねえ、何で何も言わないのよ」

問題は無いと思っていたのだが、涼子は僕が通り過ぎた後、わざわざ僕の居る所まで歩いて来て、律儀にそう聞いてきたのだ。僕は少々、涼子という少女の性格を、見直す必要があると思った。

「もう、過ぎたことじゃないかな。あの時、本当に迷惑だった。だけど、腸が煮え繰り返るほど、怒り狂うわけじゃない。些細な事だよ」

あの後、スキンヘッドに殴られて、財布からお金でも盗られていようものなら、ここまで平静かつ大人な対応は出来やしないし、絶対に許す気はなかった。けれども、そんなことにはなっていない。だから、もう僕にとってはどうでも良かった。

「あの後、アイツが私のところへ来た」

彼女にとって、あの時の出来事は終わっていなかったらしい。僕は、涼子を見つめて、出てくる言葉を待つ事にした。それが、僕のやるべき事だと思ったし、少女に逃げられた後に、スキンヘッドと会話した末路を聞く必要があると、奇妙な男気を持ってしまっていた。

「アイツに何を言ったの？」

「別に、他愛の無い話だよ。彼がどんな人生を歩み、どんな付き合いを君としてきたか。そんな話さ」

涼子は、僕の言葉を聞いて、舌打ちをした。それはもう、はっきり憎たらしいとばかりに見せ付けられた。けれども、僕は対して咎めなかった。僕は、彼女がこれほど僕を憎む理由を知らないからだ。

「ありがとう。なんて言った理由がわかった気がする」

スキンヘッドはそんな事を言ったのか。

「アンタ、何がしたいの？」

おかしなことを聞いて来る。

「何が？」

「知らないの？」

「だから何が」

「アイツのこと」

「小学校から野球をやってた」

「そうじゃない」

「君の事を本当に好いてた」

涼子は盛大にため息を吐き出したけれど、僕には何がなにやらさっぱりだった。

「彼、大友公平っていうの」

「へえ」

「知らなかったの？」

「聞かなかったし、言わなかった」

「どうして、名前も知らない相手の過去を知っているのよ」

「その大友公平君はスキンヘッド？」

「そうよ」

「なら、彼が勝手に喋り出しただけで、僕はただ聞いてあげただけだ」

「本当？」

「本当だとも、君に学食の日替わり定食を奢ってあげても良い。それも七百五十円の高い方だ」

通称肉定食と言われ、かなりのボリュームがある定食で、学食にしては高いが三人で食べれば丁度良いくらいの量はある。運動部が新入部員の歓迎会で、大食い大会をさせるのが密かな定番になっているのはこのメニューのお陰だった。

涼子は、不機嫌そうに体重を右足に乗せて、左ひざを少しだけ曲げた。右手を腰につけて、くの字を作り出して僕を見上げてくる姿は、凄く可愛かった。子供らしいけれど、十分大人の身体で、大学の図書館に居るのだから、僕は彼女が大学生かもしれないと思った。

「何か言ってた？」

涼子は静かに呟いた。不機嫌な顔はそのままだったけれど、少しこちらの様子を伺うような手探り感を覚える声だった。

「何かって？」

「たとえば、そう。人生に疲れたとか」

「彼は、ずっと疲れていたし、人生を諦めていたけど」

「えっ？」

涼子は、少し惚けたように声を挙げた。

僕はそんな涼子を他所に、足が疲れたので、適当な椅子に腰を落ち着ける。涼子は暫くして、僕の横へ寄り、隣の椅子へ同じように座って、此方を見つめてくる。

「どういう意味？」

「そのままだよ。生きていく事に疲れているようで、諦めていた」

そう、彼は諦めていた。偽る事で、辛うじて生きていたようなものだった。

「そう」

だから、涼子が僕に声を掛けてきた理由を、知ることも出来た。問い掛けてきた内容で、察する事が出来た。

「君が、悩む必要は無いと思うけどね」

気付けば、僕はそう口に出していた。

「何よ」

「いや、君が大友君の事で悔やむ必要は無いと言ったんだよ」

「だから、どうして私が」

「では、何故だろう」

僕は涼子を見据えた。横に顔を向けて、真正面からとは言いがたかったけれど、しっかりと見据えた。涼子は少しだけたじろいだけれど、僕から視線を外す事はしなかった。

「君は、どうして怯えているんだ？」

「意味が判らない」

雨音が強くなった気がした。僕は、視線を外して後ろを振り向く。窓には白いカーテンが掛けられていた。

「言葉を変えよう」

涼子は、動揺を隠していたけれど、瞳の激しい揺れが収まる事は無かった。

「君はどうして、僕に声をかけたの？」

「それは、アンタに迷惑をかけたから謝ろうと」

「だったら、出だしから間違っていないかな？」

「言いにくいじゃない」

いきなりごめんなさい、巻き込むつもりはなかったの、許して。なんて言えるわけない。

彼女はそう言って、顔を背けた。逃げるように背もたれに身体を預けた。僕はそれを追うように、背もたれに体重を掛けて、前を見つめた。視線の先には、学生の一人であろう男の子が、分厚い本を捲って、ノートに書き写している。レポートでも書いているのかもしれない。丸写しかどうかは判らないけれど、その学生は真剣な眼差しで、辛そうだった。

「でも、大友君の話をする必要は無かったんじゃないかな」

「煩いなあ。いいじゃないそんなこと」

僕の先入観からか、黒髪セミロングで、ぱっちりとした瞳を持った小柄な少女からは、およそ想像も出来ないほど、砕けた言葉遣いを使う涼子だったが、僕にはどうしてもそれが、彼女の魅力に感じられてしまう。

「ごめん」と僕は謝った。

虚勢を張っている姿。僕には、涼子という少女が大人になろうと、精一杯背伸びをしているだけに思えてならないし、きっとそう思ったから微笑ましく可愛らしいと、感じたんだろう。そう考えていた。

「ねえ」

「うん？」

「私の何処が良かったのかな」

素朴。心の底から、本当にそう思っているから零れた言葉だと僕には思えた。横に視線を向かわせると、彼女は学生の姿をじっと見つめているようだった。

「容姿が一番。そして、羨望と希望かな」

「訳わかんない」

彼女は笑った。その笑みは薄い紙切れのようだと思った。どうしてか判らないけど、すぐに破

けてしまう繊細さを、覚えた。

「今時、黒髪の綺麗な女の子は珍しいって事」

僕は、努めて明るく喋った。図書館という事で声量は勿論下げただけけれど、とにかく努めた。

「そうかな」

「そうだよ」

「見てるの？」

「男が女を見るのは本能だだと思う」

「私は？」

「勿論。あの時、大友君じゃなかったら、助けていたかもしれない」

「ありがと」

「どういたしまして」

それきり、涼子は手に持っていた文庫を開いて読書を始めた。さっぱりしているようで、その実、とても気難しいのかもしれない。

僕は席を立った。読書している涼子は僕を見る事も無かった。

奥に進んで、適当に本を選びながら考えてみる。僕は今、どうして小難しい辞書を前にして悩んでいるのかを。この辞書を手にとって、重いと感じつつもページを捲ったとして、僕に何の意味があるのだろうか。

涼子を眺める。小柄な少女だった涼子は、もっとちっぽけな存在に見えた。

何やってるんだろう、僕は。

ため息を吐き出した後、分厚い類語辞典を両手で持ちながら、僕は涼子の隣に座った。先ほどと変わらず、目の前では、学生が必死に何かを書いているし、横を見れば涼子がページを捲っている。

僕はおもむろに、辞書を紐解いていく。何かを調べようとか、そんなつもりは毛頭無かったし、どうせなら哲学書とか、もう少し文章として読めるものを、手に取れば良かったと思う。これでは、僕が隣の少女を気にかけている事が露骨に判ってしまう。

墓穴を掘った状態に陥って、僕は思わず頭を搔いて天井を見上げた。面倒ごとは嫌いだったはずだし、出来れば関わりたくはなかったはずだ。だとするならば、今、僕がしようとしていることは、どういう風の吹き回しになるのだろう。

恋かも。

まさか、僕がこの少女を好くのか。いや、好きになる理由を挙げろと言われれば、何ともなしに言う事が出来てしまう。

「今までの生活を送れば、それで良いんじゃないかな」

考えるのは辞めた。やりたいから、僕は喋りたいから口を開いた。そう、これは僕の独り言で、隣で読書している少女には関係ない。

「悩む事が悪いとは思わないけれど、そうしたところで何かが変わるなんて事は無い。それこそ、イノベーションみたいな閃きでも起これば別だけれど、そんなもの簡単に沸いてくるわけも無いし、経験が蓄積されていなければそれこそ無理だ」

誰かの大きくしゃみが響いた。目の前の学生はそんなことに気にする様子も無く、小さくた

め息を吐き出して、レポートを読み直している。完成したのかもしれない。

「どうしたって、変わらない事はある。どうしようもない事はそれこそ、沢山ある。むしろ、それが普通で悩むのが馬鹿らしくなる」

「判ってる」

涼子は小さく呟いた。

「だけど、思うだけなら良いと思わない？ 切欠にしちゃいけないの？」

「悪いとは言わないよ。だけど、それで陰鬱になる必要は無い」

「アンタには判らない」

「判らないね。君は既に変わっているのに、その事に気付かないなんて」

涼子が僕を見た。僕は視線に気付いて、彼女の顔を眺めた。その表情は惚けているようで、それが愛らしかった。

「どういう事」

「君は変わろうとした。そして、気付いていた。大友君が本当は良い人で、君に憧れを抱いていた事に」

僕は視線を戻す。

「デタラメ言わないで」

「うん。これは、勝手な推察で、独り言かな」

本当に、何でだろう。似合わないと思っていた二人の男女。実は、中身を見れば案外お似合いだったかもしれない事に、気付かされた。

「自信が無かった。それとも、期待される事が嫌いだった。期待したかったのに、頼りたかったのに。その相手から逆に期待され、頼られた」

面白い。気付けば僕の中から、喜びと楽しさが湧いてきて、笑顔を作り出していた。

「幻滅した、といよりも、同類だと知った安堵があった。けれど、望んではいなかった。本当は、誰かに依存したかったが、それが叶う環境ではなくて、必死に自分を殺して生きてきた」

目の前で推敲していた学生が席を立って何処かへ行った。僕は少し、レポートの内容に興味を持った。彼がアレほど真剣に打ち込んでいるものは一体何だろうか。

「アンタ、友達居ないでしょ」

涼子が言った。

「正解。でも、これが地なんだから仕方が無い」

深い付き合いのある友人は居ない。当たり障りの無い広く浅い付き合いが僕の交友関係の全てだった。

「正直、羨ましいかな」

「そうかな」

「そうよ」

涼子は、本を閉じてテーブルの上に置き、手を乗せた。

「何で、ありがとうなんて言われたか判った」

「それは、良かった」

「私の責任じゃなかったのね」

「そうだね」

「アンタは、何とも思わないの？」

「それほど親しい仲じゃなかった。一度きりの出会いだったからね」

「でも、アンタが死なせたようなものじゃない」

「そうかな」

「そうよ」

何度目かの同じやり取りがなんだか可笑しくて笑いあった。

「死にたかったから死んだんだよ。大友君は、ただ死ぬ決心がつかなかったから、生きていただけだった」

涼子は、僕を見つめているけれど、その顔は先ほどのような少女ではなく、一人の女のように憂いを見せる妖艶さがあった。

「そんな時、君に出会った。大友君は、戻りたかったんだ、昔の自分に。だから、昔の自分がしたかもしれない行動を取った。そして、助けた君にあらう事が懂れてしまった。どうして君に懂れたのかは解らないけれどね」

「勝手な話よね」と涼子は言った。

「そうだね。独りよがりだと思う。だけど、それは君も同じで、二人は案外お似合いだったかもしれない」

「アレと？」

「アレと」

僕は「アレ」呼ばわりされた大友君には申し訳ないが笑ってしまった。涼子の顔がしかめっ面になったのが可笑しかった。

「相成れない。だけど、お似合いだった」

「何それ、矛盾してる」

「だと思う」

「で？」

涼子は先を急かしてきた。

「大友君にも、君にも二つの人間が居たんだ」

「二つ？」と涼子は口を開いた。

「二人じゃなくて？」

「うん、二つ」

「外見と内面って事？」

「外見は、確かにお似合いではなかったね」

僕の言葉に、涼子は前を向いた。

「私だって、苦渋の選択だったの。ちょっと、優しくしたら好きだって言われた。断ったら、付き纏いよ？ そりゃ、もう不良の彼氏が居るくらいしないとダメだと思ったの」

なるほど。

確かに、それは大変だと思った。経験はないけれど、とにかく大変そうだと共感は出来た。

そんな事を考えていると涼子が、訝しげにこちらを一瞥した。どうやら、僕の言葉を待っているようだった。

「外見というよりも、内面に二つ居たんだよ。相成れない存在同士がそれこそ陰陽みたいな関係で」

僕は静かに口を開いた。

「大友君にも君にも、二つの大友君と二つの君が居た」

「片桐」

「えっ？」

「片桐涼子。呼び捨てでもいい」

「えっと、じゃあ、片桐さん？」

「何よ」

これも、彼女の魅力の一つなのかもしれないと思った。呼び名を気にして名前を教える少女。「片桐さんには、二つの人間が居る。素の自分と偽りの自分。そのせめぎ合いによって、片桐涼子という人間の内面が構成されている」

「そういうものなの？」

「これは、勝手な話だから、深く考えたらダメかもしれない」

「判った。でも、解る」

涼子は、小さく頷いて見せた。

「大友君にも二つあった。輝かしい人生を歩んでいた中学校までの自分と、挫折を経験してから転げ落ちて行った自分。どちらも同じ大友という人間なのに、彼は過去の自分を理想の中で美化して行った。あの頃に戻りたいと切に願い始めていた」

僕は、ゆっくりと口を動かす。ここには、水っぽいコーヒーが無いから、少し粘つく唇が嫌らしいと感じた。

「片桐さんにも二つある。変わりたいと願う自分と、今までの自分。どちらも同じ片桐涼子という人間なのに、変われる事で世界が変わると本当に思っている」

涼子は腕を組んで見せた。既に、僕の隣に座っている片桐涼子という少女の怯える様子は消えていた。漠然としながら、空気を小刻みに震わせて、言い知れぬ恐怖を必死にその華奢な身体で受け止めていた彼女は、今とても綺麗な姿をしている。

「実のところ、何も変わらないし、戻る事も出来はしない。人間は一人で、過ぎ去ったから過去で、まだ訪れていないから未来で。過去は望んでも無理な事で、未来は未来で絶対訪れるけれど、その未来から逃れる術は無い。どんな未来だろうと訪れる」

一人の少年は昔に夢焦がれて、今と未来に絶望してしまった。

一人の少女は昔と今に絶望して、未来に夢焦がれてしまった。

「戻ろうとする事は無理だけれど、変わる事は出来る。けれど、それは今しか出来ない。今という不確定な場所でしか変われないし、融通も利かない。それを知りながら、片桐さんは未来を夢見た。もしかしたら変われるかもしれないと願った。だから、後悔している。所詮は幻想でしかなかった事だと。そう思いたいのに、気付けば新しい幻想を抱き、未来を夢見る」

少年は、戻れぬ事を知り、生きる意味を失った。だけれど、夢を見せてくれた人に。希望をほ

んの一瞬でも見せてくれた少女に感謝出来るほど、変われる事が出来ていたはずだった。

それが”死”という結果になってしまったけれど、大友君が決めた事なので、対して親しいわけでもない僕がとやかく文句を言う必要も無ければ、悲しんであげる道理も無い。

「前を見ても変わる事は出来ない。今を見なければ変わった事に気付きもしない」

少女は、自分を呪った。変わりたいと必死に足掻いたかもしれない。けれど、現実が変わっていなかった。だからこそ、誰かに縋りたかった。けれども、今まで積み上げてきた自分自身がそれを邪魔してもいた。

「大友君が死んだところで、何の影響も無い。僕にとって、既に彼は過去の人で、僕に何をしたというわけでもない。」

齒がゆい思いをしていた中で、少年と少女は出会った。最初は、希望を。そして直ぐに失望を両者に等しく与えた事だろう。

「感傷すらない。そもそも名前すら知らなかった人の死を悼むほど僕は優しくはない」

何故、少女がここまで苦しみ、悩まなければならなかったかを知る術を僕は知らないし、正直に言えばあまり興味が沸いてこない。

「今、か」と涼子は呟いた。

「今なんて考えた事無かった」

せめて、僕は気付いて欲しかった。ただ、なんともなしにそう思った。

「いつも今を生きているけれど、それは目に見えた時、肌で感じた時、頭で考えた時。既に、過去になり、新しい未来が迫ってきているんだから、難しいかもしれないね」

「難しい話は苦手」

「時の流れをどう区切るかで、解るのかも？」

「どうやって？」

涼子は僕を見た。そこには、僕が出会った事のない少女が、好奇心旺盛な大きい瞳を輝かせながら座っている。

「一日と今とするか、一時間を今とするか、それとも一秒？ コンマの単位まで細かく刻む？」

「なるほど、自分で決めれば良いのね」

「片桐さんは、片桐さんの世界で生きていけば良いんだよ。何も、他人の世界にあわせる必要は無いし、社会に合わせようとしなくても良い」

「それ、本気で言ってる？」

涼子は不満そうに口を尖らせた。

「勿論。きっと理解してくれる人は出てくる。いないなら居ないで、カルト的な人気者になる可能性もある」

「何それ」

「異端者は勇者になるか魔王になるかの二択しかないってこと」

評価されない人間は居ない。それこそ、評価されない人間は、存在している事を認識すらされていないだろう。

良い、悪い。どちらにしても、評価してくれるという事は、客観的に自分を見つめなおす事が

出来る手段の一つだ。

彼女は、今、僕と大友君という、人から今まで受けた事のない評価を貰ったんだ。これを生かすも殺すも、彼女自身。

「そう、かな」

「そうだよ。だから、大友君は魔王になって、君は魔王になりかけてた」

「笑えない」

「でも、片桐さんはもう」

「解ってる」

涼子はそう言って微笑を浮かべた。

「そう、なら良いかな」

「うん」

目の前に居た学生が帰って来たのを僕と涼子は確認した。彼は、またレポートを執筆し始める。

「もう行くね」

その様子を見ながら、涼子は静かに席を立った。僕は、止める事もせずに目の前で作業する学生を観察していた。

「ねえ」

「うん？」と僕は顔を横に向けた。

涼子が、僕を見下ろしている。

「付き合ってたって言ったらアンタはどうする？」

「どうだろう。言われた事が無いからな」

「馬鹿」

「ごめん」

「でも、思ってくれる？」

「お安い御用で」

「ありがと」

僕は席を立つと、学生の後ろへ向かう。彼の肩からレポート用紙を覗き込む。

なるほど。

彼はレポートなんて書いていなかった。

「君」

「えっ？」

「これは、小説かな？」

「あ、はい」

「読んでも良いかな？」

「えっ？ でも、まだ推敲の途中で」

「出来ているところまでで構わないから。興味があるんだ」

「あっ、はい。なら、どうぞ」

それは、在り来たりな男女の恋愛小説だった。

主人公は男子高校生でヒロインの女子高生を不良から救い出した。けれど、二人の第一印象はあまり宜しくない。だけど、学校生活を過ごす内に打ち解けて、やがては結ばれるのだろう。

僕は、興味を持った事を後悔した。視線の先には、期待を込めた視線を向ける学生が居る。まるで、夢見る純粹無垢な少年だった。

さて、どう言えば良いのだろうか。

(了)